病院図書室　13(4):131-133, 1993

〔寄 稿〕

オーストリア国立図書館での参考調査

小田中　徹也

今年5月中旬、ウイーンを訪れる機会があり、その折、同行した当院皮膚科医師が求めていた事項について一種の参考調査をオーストリア国立図書館（Osterreichische Nationalbibliothek）で試みました。そこで、旅行者でも海外の図書館で目的の資料を検索して閲覧し、必要な部分はコピーすることができた体験を紹介します。

1．オーストリア国立図書館

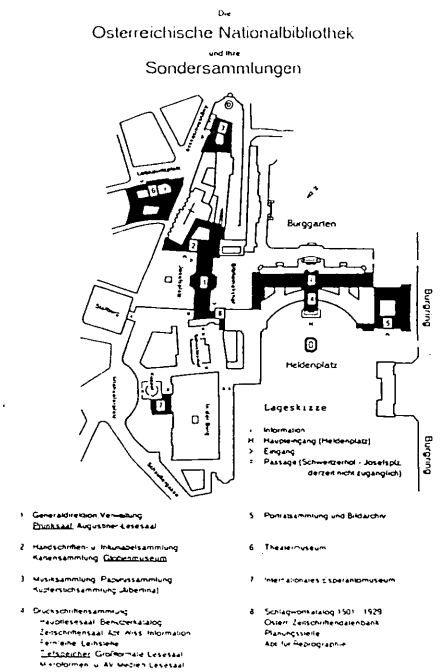


図1　オーストリア国立図書館

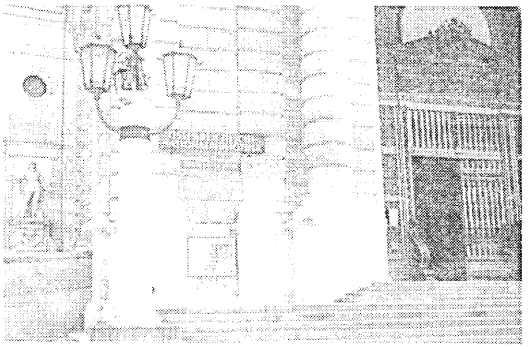
オーストリア国立図書館は、ウイーンの中心地にあるハプスブルク家の広大な元王宮の一部を占め、8つの建物に分かれています（図1参照）。元王宮はさらに、ブリューゲルなどの絵で有名な美術史博物館（Kunsthistorisches Museum）をはじめ数々の博物館となっています。ところで、当図書館の Prunksaalは観光案内書[1]によれば、内部は「豪華絢爛、ただ息をのむばかり。220万冊の蔵書や3万6,000冊の写本、8,000冊の初期印刷本、作曲家の直筆楽譜などが金の装飾と大理石の柱の空間に納まっている世界一の美しい図書館」と謳われています。確かに立派な建物で、さすがハプスブルクの栄光と思いましたが、私たちはそれを堪能するのではなく、目的の本を探し出し閲覧できるかに関心を集中していました。

2．インフォルマチオン

日本を発つ前に、皮膚科でよく知られている外用剤の名称「クンメルフェルト氏・・・」に関する書籍をウイーンで見つけたいと、国際学会に参加したその医師から聞いていました。そこで私は、せっかく図書館に行くのなら単に観光ではなく利用に行くことを提案しました。半信半疑であまり期待はされなかったのですが、とにかく探してみましょうとのことになり、まず中央入口から入ったインフォメーションで図書館カードを操ることから始めました。ちなみに、カードボックスの隣には10台程のコンピューター端末機が並んでいましたが、ドイツ語で表示されている画面には操作の自信がなかったので二人でカードを調べました。

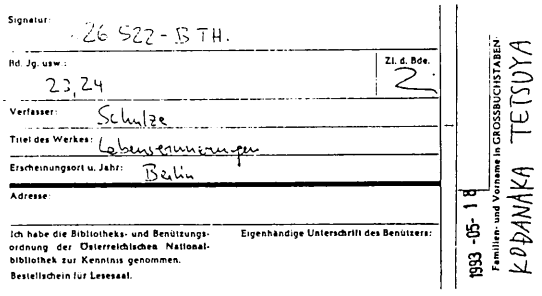
こだなか　てつや：国立京都病院図書室

図書館カードを操るのは久しぶりのことでしたが、意外と簡単に「彼女」の伝記本[2]が一冊だけ見つかりました。分類や表記法は日本とは少し異なりましたが、内容は充分にわかりました。あとは1915年にベルリンで発行されたこの古い本を外国人旅行者が手にとって閲覧できるかです。



国立図書館中央入口

そこでカウンターへ行き、いかにも司書風の美人に例の書物を外国人旅行者が閲覧できるかと尋ねますと、可能ですとの答えが笑顔でかえってきました。そして、その本は演劇博物館（Theater museum）に所蔵されており、所定の用紙に書誌データを記入してそこへ提出してください、といわれて渡されたのが図1の地図と図2の申込用紙です。ただし当日は休館日であり翌火曜日に行ってくださいとのことでした。私は、外国人には利用できないともし言われたら、日本からきた図書館員で利用者の要求に何とか応えたいと思っている、それに協力して欲しい、などのもっともらしい文句を考えていましたが全くの杞憂でした。



Signatur: 26 522-B TH.
Rd. Jg. usw.: 23,24　Zl. d. Bde. 2.
Verfasser: Schulze
Titel des Werkes: Lebenserinnerungen
Erscheinungsort u. Jahr: Berlin
Adresse:
Ich habe die Bibliotheks- und Benützungsordnung der Österreichischen Nationalbibliothek zur Kenntnis genommen.
Eigenhändige Unterschrift des Benützers:
Bestellschein für Lesesaal.
1993 -05- 18
Familien- und Vorname in GROSSBUCHSTABEN
KOBANAKA TETSUYA

図2　閲覧の申込み用紙

3．演劇博物館

翌日、演劇博物館へ行き守衛さんに本をみたい旨伝えると、快く通して案内してくれました。2階廊下の奥の部屋に小さなカウンターがあり、ラフなスタイルの男性司書がひとり応対していました。図書館カードから転記した書誌事項を示しながらその本の閲覧を申し出て記入方法を聞くと、親切にも彼自身が申込用紙に書誌事項を記入してくれました。そして、明日パスポートを持って来てください用意しておきます、とのことでした。翌水・木曜日の2日間はブダペストへ行く予定にしていましたので、そのことを説明して金曜日に来たいと頼み、ＯＫ！との返事をあとにそこを退室しました。

金曜日の朝、10時の開館には時間もあり、期待に胸膨らむ本にやっと出会う前祝いに、演劇博物館近くのビストロの路上テーブルでビールを飲み景気をつけました。そのせいか入館の時、いかつい数人の守衛さんからはこの日不審そうな顔をされ、予約してあることを伝えるとやっと通してくれました。後日、同行の先生からは図書館へ行く前に不謹慎だと叱られました。カウンターには例の男性がいましたので私の名前を伝えると、予約した本とテーブルキーを前に出して、パスポートを預けるように言われました。私が本のコピーはできるかと尋ねると、彼はニヤリとして日本製のコピー機があるから大丈夫と指さしたので、私も笑ってしまいました。なお、カバン類は持ち込めずコインロッカーに入れておきます。

4．資料と閲覧

カウンター横から閲覧室に入ると机が50人分ほど並び、周囲の壁の書架は二次資料や事典類だけが納まっています。そこでようやく先生は目的の書物を繙くことになりました。書物自身が「文化」を感じさせる美しい装丁の上下2巻本は小さな髭文字のドイツ語がびっしり詰まっていました。先生がその本を調べている間、私は演劇事典類で“Kummerfeld”を探しました。すると何種類目かの事典[3]の中に「クンメルフェルト」と皮膚科を

演　劇　博　物　館

結びつける内容の記述を見つけたので先生に知らせると、我が意を得たりと先生も大喜びでした。午後は先生が学会へ出席する予定になっていたので時間もなく、必要箇所を自分たちでコピーし司書の方にお礼を述べ退館して、今回の参考調査を終えました。カイゼル髭のきむずかしい顔をしたドクトルと思われていた「クンメルフェルト氏」は女性で、しかもゲーテが賞賛したと伝えられる女優だったのです。なお、先生が医学雑誌に「クンメルフェルト夫人」の肖像を紹介されていますので、興味のある方はご覧ください。[4]

5．ウイーンの印象

この旅行は観光と日本語日本文化を専攻するウイーン大学生に日本語ワープロソフトのインストールと使い方を教えることが主な目的でした。参考調査は旅の途中から生じたものですが、謎の人物を探してウイーンの街を歩きまわる気分は推理小説にも似た楽しさでした。私はドイツ語を話せないので街でも図書館でも残念ながら会話はすべて英語で通しました。ただし、“GruB Gott!”や“Schuldigung!”（ウイーン訛りでは「テューリグォン」と聴こえますがドイツ語では“Entschuldigen, Sie!”）など幾つかのお国ことばを適宜使えば好感を持たれるのはどこの国でも同じです。同じドイツ語でもまろやかに響くウイーンとベルリンでは当地の人々に言わせると、京都弁と鹿児島弁ほどの違いがあるとのことでした。ウイーンの街の美しさは今更あらためて申しませんが、人々の気持よいマナーとライフスタイルはさすが大人の街でした。参考までに、地図は必ず現地で入手したものを使うことが大事です。日本の案内書は参考程度にしておくのが無難でしょう。

《参考・引用文献》

1）地球の歩き方(36)；ウイーンとオーストリア　東京　ダイヤモンド社　1993

2）Emil Benezé:Lebenserinnerungen der Karoline Schulze-Kummerfeld, Selbstverlag der Gesellschaft fur Theatergeschichite, Berlin, 1915

3）Kosch, W.:Deutsches Theater Lexikon; Biographisches und Bibliographisches Handbuch, Verlag Ferd. Kleinmayr, Klagenfurt und Wien, 1960

4）荻野篤彦：ニキビ治療剤「クンメルフェルド氏液」の名称の由来について、皮膚科診療、19(9)：832，1993